

トリ目・ウオの目・おか目はち目⁶⁰

「沖縄で会ったトーマス・マンの娘」



三 裕 藤 齋

ラスに描いて成功している。

さて、七月二〇日は「海の記念日」。海と言えば、二六年前の一九七五年、沖縄本島の北部本部町で、「沖縄国際海洋博覧会」が開催され、筆者はJALから出

向し、博覧会協会の海外報道を担当した。わが「トリ目・ウオの目」も60回目。だから、『うわさ』誌の読者のために、取って置き中の取って置きのお話を披露しよう。では、いつものように幕が開く。

Thomas Mann. 一八七五年、ハンザ同盟で有名な北ドイツの海に近い町、リュウベックの大穀物商の家に生まれた。

一八九一年に父が亡くなったが、兄のハインリッヒもトーマスも実業家肌でなく、結局一〇〇年以上続いた穀物商は解散、トーマスは再婚した母を追って四九年ミュンヘンに移った。

マンはその後、『ブッデンブロック家の人びと』(一九〇一)、『トニーオ・クレイガー』(一九〇三)、『魔の山』(一九二四)、『ヨセフとその兄弟』(一九三三〜四三)など、最もドイツ的で重厚な小説を書いた。一九二九年ノーベル文学賞を受賞。

一九〇五年、ミュンヘン大学数学科教授でユダヤ人資産家アルフレート・プリンクスハイムの娘、カチア(一九八〇年没)と結婚。長女エーリカ、長男クラウス始め男女三人ずつ、六人の子の親と



なる。

一九三三年、ナチから逃れスイスへ、さらにアメリカ(三八年)へと亡命する。

戦後の一九五二年、右傾の米国を去り、チューリヒ近郊キルヒベルクに落着く。五

五年同地で血栓症のため亡くなった。マンの多くの作品のうち、『トニーオ・クレイガー』は、若き日の現実と、反発する芸術的精神の葛藤を描いた彼自身の自伝的作品であるといわれる。

また、『ブッデンブロック家の人びと』は、がむしゃらな勤労精神で家を興した一族に芸術的な血が入り、四代目で家業が崩壊する物語。マン家をモデルとしたリュウベックの商家の年代記である。

マンの母方の祖母は、ポルトガルからブラジルに移住した大農場主で、母ユーリアは、ピアノと歌に優れた典型的な南欧系の情熱的美人だった。

マンの六人のこどもたちは、皆天才肌で、特に長女のエーリカ(一九〇五〜六九)は、才能と美貌に恵まれていた。父の米国亡命の際はよき通訳、スポーツマンでもあった。戦争末期には、アメリカ軍の軍服を着てドイツ戦線に参加した。

長男クラウス(一九〇六〜四九)は、優れた作家、評論家として成功した。だが、反ナチ活動ののち、一九三五年にアメリカへ亡命、米軍兵士となった。戦後の一

財団法人

黒田奨学会

福岡市中央区大名2-2-41-308

フラワーズ



九州種苗株式会社

本社 〒812-0061 福岡市東区宮松新町1番11号
TEL(092)621-2100代 FAX(092)623-4110番

キュータネ・インテラス(川崎店)
TEL (092)281-0917番
FAX (092)281-9015番
キュータネ・マリアハウス(藤不孝路店)
TEL-FAX (092)734-0008番
キュータネ・グリーンテラス(筑紫野店)
TEL (092)928-5055番
FAX (092)928-5530番

九四九年、カンヌで自殺。もともと死に憧れを持っていたともいわれる。

一九〇九年生まれの次男、アンゲルス・ゴットフリート・トーマス(ゴロー)は、歴史学を中心に多くの書物を著した。

三男ミヒエルは、アメリカの大学でドイツ文学を講じる一方、ヴィオラ奏者として、日本にも戦後演奏旅行にきた。

一九一〇年生まれの子女モニカは、一九四〇年、ハンガリー人の夫、イエニー・ラニイとともに英国の港から米国に避難の途中、乗船した客船がドイツの潜水艦に撃沈され、モニカは救助されたが、イエニーはモニカの目の前で溺死した。

海洋博の会期中の九月三〇日から一〇月四日の五日間、会場内の「海洋文化館」と恩納村の「ムーン・ビーチ・ホテル」を会場として、「パーチェム・イン・マリブス(海に平和を)・VI」と題するシンポジウムが開催された。

当時、領海、海洋資源利用などに関する国連海洋法会議が第3回まで終了していたが、成案決定には未だ道遠し、という状況だった。

そこで、助言のための「IOI(国際海洋協会)」という機関が設立され、本部をマルタ大学に置き、スリランカの国



連代表 H・S・アメラ シンゲ大使

を議長に、世界各地でシンポジウムを開いていた。その第6回目を、海洋博協会や日本政府が招聘したのである。

ホテルでの第一日の冒頭、記者用の冊子が配られ、企画委員が紹介された。

司会者は「ミゼス・エリザベス・マン・ボギーズ」と、彼女を英語で紹介した。割に小柄だがとても活動的に見えた。

日本語の資料には、マルタ大学にある本部の企画担当理事で、「エリザベス・マン・ボージェーザ」と、記してあった。

彼女の英語の開会挨拶は流暢だったが、筆者はその中にドイツ語の響きを聞いた。えーっ、まさか!

英語の資料を、忙しくもう一度見た。「Elisabeth Mann Borgese」

と、その名は綴られていた。「ザ」がなく、ヨーロッパ式の名、それに「マン」の「ン」が目だった。マンの三女の名は、エリーザベトというはずだ!

筆者の心臓が早鐘を撞くように鳴り始めた。一方では、別の自分が、筆者を落ち着かせよつとした。

「ここは、沖縄だよ。考え過ぎだ!」

そうだとおもう。そのとおりだ。トーマス・マンの娘が、沖縄にいるはずがない。

いや、待てよ。エリーザベトは、イタリア人と結婚したという話をどこかで読んだ。ローマの庭園の名にもある、名家 Borgese には、h があるから違う。

そうだ。彼女は、シカゴ大学の有名なイタリア人歴史学者と結婚した。確か Borgese とかいった。

「ボギーズ、ボルゲーゼ、ボルジェーゼ」コーヒープレイクが来るのもどかしく、筆者は彼女に近寄り恐る恐る尋ねた。

「もしかしたら、もしかしたらですが、あなたは私の大好きなドイツの作家、トーマス・マンのお嬢さんなのではありませんか? もしそうなら、どの作品にも海の匂いがあるお父様譲りで、やっぱりあなたも海から離れられないのですね」

「血は水より濃い、といいますものね。そのとおりなのです。でも、ここにも父の小説を読んでくださっている方がいらっしやうとは……。私は父のおかげで、どこへいっても友達がいるのですよ」

彼女は微笑み、筆者と会ったことを喜んでくれた。それから、父マンをはじめとして、東京で長年音楽教師を勤め、日本で亡くなった、クラウス・プリングスハイム(彼女の母カチアの双子の兄弟)のこと、そして、彼女の夫、ジュゼッペ・アントニオ・ボルジェーゼのことなどを話した。

エリーザベトは、その後『海洋のドラマ』(一九七七)、『海の農場』(一九八〇)を上梓し、海との深い関わりを実証した。あれから既に二十六年。まさに思い出に残る一期一会の出会いだった。

CLUB AZAMI



博多区中洲4丁目1-37
TEL 代表 (281) 0417